

星 雲

— アベ・レーナルと史的唯物論の起源 —

(その一)

渡 辺 祐 邦

「さらに、もっと驚いたことには、これまで星雲とよばれてきた星も、異常なしかたでまきちらされた小さな星の集団なのです。」
(ガリレオ・ガリレイ『星界の報告』より)

はじめに

ローゼンクランツは、その著『ヘーゲルの生涯』のなかで、ヘーゲルの青年時代の読書に触れて、こう書いている。

「レーナルの『両インド史』(Raynals *histoire des deux Indes*)、ヒュームの英国史、シラーの歴史的著作を、彼は特に構成技術のために研究した。⁽¹⁾」

十数年まえ、はじめてこの記述に接した頃、私は不明にも、この『両インド史』がいかなる書物か全く知らなかった。だから、ヘーゲルと云う人は、若い頃にはやたらと好奇心が強く、そのため自分の専門とは異った分野に属するインド史関係の書物にも興味を抱いたのだらう位にしか考えなかった。この考えが完全に間違っていることを教えられたのは、その後別な機会に、坂田太郎氏らの訳したダニエル・モルネの著書『フランス革命の知的起源』を読んだときである。

モルネによれば、このレーナルの『両インド史』こそ、宗教的専制と政治的専制に対する最も激しい非難を十八世紀の最後の三十年間にまきちらした問題

(1) K. Rosenkranz, *Georg Wilhelm Friedrich Hegels Leben*. Berlin 1844.
Nachdruck, Darmstadt 1963, S. 60.

の書であり、しかも、ヴォルテールとルソーについて当時のフランスで最も多く読まれた、いわばベスト・セラーズのひとつだったのである。それは「何よりも狂信と迷信との罪惡の歴史であり、……ヨーロッパ人、とくにカトリック僧侶の愚行と暴虐のいまわしい図絵である」と、モルネは書いている。同書の特徴づけるものは、必ずしも独創的ではないが大胆な思想であり、「モンテスキューにも、ドルバックにも、マブリにも見られない憤激と反抗の調子を帯びた、専制主義への激烈な非難である。」同書は、1781年焚書の判決を受けながら1789年以前に40版も刷られ、「専制君主への憎惡と神聖な自由への愛を最も効果的に広めるのに貢献した⁽²⁾」いわば十八世紀の政治文学の最大の作品だった。

ところで、もしそれが事実だとするならば、若いヘーゲルがベルンに滞在中この本を読んだと云うことは、彼のその後の哲学的発展になんらかの影響を及ぼさなかつたらうか？それほど永続的な作用はなかつたとしても、それは、少くともヘーゲルの初期の神学的論文や政治的論文におけるキリスト教の既成性批判や専制政治の批判には、はっきりと立証できるような影響を与えているのではあるまいか？これは極めて魅力的なテーマであったが、研究は思いつき以上に進展しなかつた。なにしろ『両インド史』のテキストそのものがまったく手に入らないのである。これは、同書が最も大量に出廻った1780年代ですらわが国の天明年間に当り、しかもレーナルの名がほとんど忘れられたため、『両インド史』はその後再版も複製もされなかつたのだから、むしろ当然と云わなければならない。

ところが、その後たまたま眼にした『フランス社会思想史文献目録⁽³⁾』と云う奇妙な題名の本によって、小樽商科大学附属図書館にこのレーナルの『両インド史』が所蔵されていることを知った。この目録は、小樽商大の前身小樽高等商業学校の手塚寿郎教授が留学中購入され、没後御遺族より同校に寄贈された

(2) D. Mornet, *Les Origines intellectuelles de la Révolution Française*. Quatrième édition, Paris 1947, pp. 235-237. 邦訳, 上, pp.341-343.

(3) 『フランス社会思想史文献目録』坂田太郎編, 春秋社1966. p. 206 (3360).

同教授の蔵書、いわゆる「手塚文庫」の目録にほかならず、したがってこの『両インド史』も、同書の価値を知っておられた同教授がパリの古書市等でそれを発見して、持ち帰られたものと思われる。これは全く予期しない幸運であったが、さらに幸なことにその後間もなく私は小樽商科大学に勤務することになり、書庫に入ってこの稀覯書を直接手にとって調べることができることとなった。

手塚文庫の『両インド史』は、初版ではなく、1781年ジュネーブのペレ書店 (Jean-Leonard Pellet) から発行された四折版十巻本である。と云うことは、レーナルがフランス国内での印刷をあきらめ、1780年ジュネーブで印刷させた改訂版(第三版)の再版と云うことになる。ただ、どうしたわけか、九冊しかなく、最後の第十巻が欠けている。それにしても貴重な文献と云わなくてはならない。しかも、その後さらに書庫を探していると、このほかにもう一セットの『両インド史』が所蔵されていることに気がついた。これはやはり手塚教授が購入され、小樽高商に納められたシェール教授の蔵書の一部であるが、同様にペレ書店発行の改訂第三版で、ただしこちらの方は二折版の四冊本である。⁽⁴⁾ 結局、小樽商科大学は、海外の古書籍商を通じても容易に手に入らない十八世紀思想史の貴重な文献を二セットも所蔵していたことになる。

ところで、この二セットの『両インド史』を借り出して眺めているうちに、二三の奇妙な事実⁽⁴⁾に気がついた。第一に、それはこの本の大きさである。私はモルネの記述から、ポケットに入るような小型本かパンフレットを想像したのだが、実物の『両インド史』は子牛革装四折版十冊ないしは二折版四冊の堂々たる大著である。その背の金文字は今では薄れているが、かつては美しく輝いていたにちがいない。とてもこれが大衆の扇動だけをこととする政治的な暴露文書だったとは信じがたい。それに読み通すだけでも相当な分量である。現に、フランス人の一研究者すら、『両インド史』の分量にへきえきして、こう書いている。「いま私の眼の前にある版は、四折版で十巻もある。私は、そ

(4) Cf. *Catalogue de la Bibliothèque du Professeur Gustave Schelle*. éd. Prof. M. Hamabayashi, 1962, p. 80 (991).

れを最初から最後のページまで読み通す忍耐力がなかったことを、正直に告白する。⁽⁵⁾」では、この尠大な著作は何を目的としたものだったのか？著者レーナルは、いかなる意図からこれを書き、大衆はどんな目的でそれを買ったのだろうか？

第二の奇妙な点は、その内容が意外におとなしいことである。もちろん、そこにはモルネが指摘するような大胆な記述があちこちに見出される。だが、それは全体の5パーセントにも満たないもので、残りの大部分は、ヨーロッパ各国の歴史とその植民地に関するポピュラーではあるけれども、非常にまじめな記述である。では、このような固い内容の本がなぜベストセラーになったのだろうか？

これらの疑問を感じて、私は私なりに思想史の面から、この忘れられた十八世紀政治文学の傑作にもう一度照明を与えてみたいと考えるようになった。おそらく上述の諸問題は十八世紀フランス社会思想史ないし政治思想史の大問題であり、それを完全に解明することは、私如き者には、到底不可能であろう。だが、レーナルの名がほとんど忘れられ、ヨーロッパの革命的精神に多大の影響を与えた彼の著作がまったく顧みられなくなっている現在、私がそれを試みることは無駄ではないであろう。わが国ではじめてレーナルの『両インド史』の社会思想史的な位置づけを試みられ、レーナルの生涯と思想について唯一のまとまった記述を残された田辺寿利教授は、その著『フランス社会学成立史』のなかでこう書いておられる。「今日、レーナルの名は一般に忘れられ、『両印度史』は殆ど読まれていない。しかしながらこの書は、アンシクロペディストの思想運動が生んだ、十八世紀の代表的一文献として、永久に顧られなければならぬものである。⁽⁶⁾」前記の手塚文庫の『両インド史』も、今日まで果して何人の研究者によって利用されたことであろうか？おそらく多くの思想史研究者はその存在すらも気づかなかつたのではあるまいか？もしそうだとすれば、これはこの貴重な文献をもたらされた故手塚教授の博識に対して誠に申し訳けない

(5) M. Leroy, *Histoire des Idées sociales en France. De Montesquieu à Robespierre*. Paris 1947, p. 231.

(6) 田辺寿利『フランス社会学成立史』有隣堂出版1954, p. 266-7.

ことである。同書を研究することは、後続する研究者の義務とも使命とも感ぜられるのである。

以上が、私がレーナルの著作を研究しはじめた動機であるが、もとより私は十八世紀政治思想史やフランス革命史の専門家ではない。レーナルの生涯や『両インド史』に対する同時代人の反響等については、フジェールの『革命の先駆者。アベ・レーナル』⁽⁷⁾に頼らざるを得なかった。ついでながら、このレーナルに関する唯一の信頼に足る伝記的研究であり、今日では全く手に入らない稀有の文献も、手塚文庫のなかに見出された。

ただ、「哲学的歴史」としての『両インド史』の視座ならびに方法の分析に関しては、最近の研究⁽⁸⁾を参照して、多少新しい見方をしたつもりである。従来の研究は、モルネにしても、フジェールにしても、その著作の表題が示す通り『両インド史』をフランス革命と云う狭い枠のなかで考察し、しかも現実に生じた革命からその価値を判断しようとしているようにみえる⁽⁹⁾。しかし同書は「哲学的歴史」と云う十八世紀に特有なジャンルに属する作品として、より広範な大衆の意識的革命ないし知的覚醒と云う見地から考察されるべき内容を含んでいるように私には思われる。この変革された意識が、史的唯物論の母体などと、ここで私は主張するつもりはないけれども、その方向にむかって大衆の意識をまず教育したものは、疑いもなくこの十八世紀の哲学的歴史なのである。ヘーゲルは、のちに『精神現象学』において、世界史の発展過程と個人の意識の形成過程をないまぜると云う極めてソフィスティケートな方法を発

(7) Anatole Feugère, *Un Précurseur de la Révolution. L'Abbé Raynal (1713-1796)*. Angoulême 1922.

(8) レーナルに関する単独の研究ではないが、次の諸著は、『両インド史』に多くのページを割いており、非常に参考になった。

A. C. Kors, *D'Holbach's Coterie. An Enlightenment in Paris*. Princeton 1976. I. O. Wade, *The Structure and Form of the French Enlightenment*. Vol. I & II, Princeton 1977. J. Dagen, *L'Histoire de l'Esprit Humain dans la Pensée Française*. Strasbourg 1977.

上記のほか、G. Gusdorf, L. G. Crocker の諸著も参考にしたが、それらの書名は文末の参考文献に記載する。

(9) Cf. Feugère, *op. cit*, p. 405.

明して、この教育を行おうとした。しかし十八世紀の哲学的歴史家は、もっと直接的にそれを行ったのである。副題の「史的唯物論の起源」と云う言葉は、それ程の意味でシャルル・リーの野心的な著作『ヴォルテール。史的唯物論の起源の研究』⁽¹⁰⁾から借りてきたものである。したがって、本稿はマルクス主義の古典的思想家とレーナルの著書との直接的な関係を論じたものではない。

なお本稿は、わが国でほとんど知られることのない啓蒙主義思想家レーナルの著作家としての生活も詳しく述べたため（それは彼の思想と決して無関係ではない）、150枚ちかい長さになった。そのため、ここには前半の二章を載せ、後半に予定した「商業・人間性・歴史」および「植民地・奴隷制・キリスト教」の二章は、次号以下に投稿することとした。よろしく御寛恕を乞う次第である。

1 人類の星

1772年、ナントのある出版社から、『両インドにおけるヨーロッパ人の植民と商業の哲学的・政治的歴史 (Histoire philosophique et politique des Établissements et du Commerce des Européens dans les deux Indes.)』と云う長たらしい表題をもった四折版六巻の書物が出版された。この一見、植民史とも商業史ともみえる書物の真の目的は、しかし、別のところにあるらしかった。と云うのは、その匿名の筆者は、ポルトガル人の新航路発見にはじまる近代ヨーロッパ諸国の東洋との交易や新大陸の植民地について述べながら、同時に宗教的狂信、専制政治、奴隷制等のあらゆる地上の権力に対して激しい攻撃を加えていたからである。

それにも関わらず、この本はよく売れた。当局はこの本のパリでの販売を二十五部しか許可しなかったため、それらは非常に高値で取引きされた、とプランは書いている。⁽¹¹⁾ 秘密のルートを通じてパリに持ち込まれる初版はたちまち売り切れ、1774年に第二版が刷られたが、この第二版になると、もうなかば公然

(10) Charles Rihs, *Voltaire. Recherches sur les Origines du Matérialisme Historique*. Deuxième édition, Genève 1977.

(11) J. -P. Belin, *Le Mouvement philosophique de 1748 à 1789*. Paris 1913, réimp. New York, p. 306.

とパリの随所で売られる始末である。マイスターは、この『両インド史』の成功と普及について、次のように書いている。

「私たちは、そこに人類と書物にとっての一種の星があると云うことを認めないわけにはいきません。今日では、どんな禁書も焚書も、その大胆さにおいて『哲学的歴史』にくらべることはできないでしょう。それでいて、同書はいたるところで全く公然と売られています。おそらくそれは、すべての人がこれまでおとなしく我慢してきた地上のあらゆる権力を、そのおとなしさにくらべられる大胆さでこの本が攻撃しているからではないでしょうか？」⁽¹²⁾

開明的な貴族で、みずからもレーナル家の客となったりしたセギュール伯爵もまた、つぎのように回想する。

「『哲学的歴史……』は、当時一般的熱狂の対象だった。人びとが感嘆したものは、単にこの重要な著作の実際的価値ではなかった。人びとは、そこに黒人奴隷制に反対する最も強固な弁論を見出した。」⁽¹³⁾

『両インド史』を称讃する同時代人の言葉を探し出したら、それこそきりが無いであろう。ともかく、こうして『両インド史』は緒戦においてすでに非常な成功を収め、その後約二十年間に四十版ちかくも出版されることになるのである。

その筆者は、最初デュクロともディドロとも云われた。けれども、捜査当局はまもなく真の筆者を探し出した。この筆者レーナルは、自分が『両インド史』の著者であることを肯定しなかったけれども、また否定もしなかった。そこで1779年、当局は危険な書物として『両インド史』の販売を禁止するとともに、その筆者の嫌疑でレーナルに国外追放の刑を言い渡す。こうなれば、もう隠しておくことも意味がない。レーナルはリヨンを通過してスイス国境へ行き、かねてから誤植が多く訂正の必要があった『両インド史』を完全に改訂し、大胆な箇所を削るどころかいっそう大胆な調子に書き改めた第三版を、著者名入

(12) *Correspondance de Grimm*, X, 455. Belin, *op. cit.*, p. 308より引用。

(13) Comte de Ségur, *Mémoires*. Paris 1824, t. I, p. 293, A. Feugère, *op. cit.*, p. 410より引用。

りで、ジュネーブのペレ書店から出版した。これが、最も普及したジュネーブ本である。

ここで、わが国ではほとんど知られていないこの『両インド史』の筆者レーナルの経歴について、簡単に考察しておこう。

「アベ・ギョーム・トマ・フランソワ・レーナル (1713—1799)。司祭、編集者、文学通信員、有力な政治史家のゴースト・ライターであり、かつアンジャン・レジームの最後の十年間にかけては、啓蒙主義第一の哲学的歴史家であるレーナルは、同時代の栄光に比べれば歴史の闇のなかに沈んでしまった。文筆と政治の世界に一大事件をひきおこした著作、『両インドにおけるヨーロッパ人の植民と商業の哲学的・政治的歴史』(1770)の著者レーナルは、1789年頃には、フランスで最も広く読まれ、かつ広く迎えられた存命中のフィロゾフであった。そして、ルソーおよびヴォルテールとともに、読書人の世界における三つの最も有名な名のひとつだった。⁽¹⁴⁾」

以上は、パリの啓蒙主義者集団に関する最新の研究であるA・C・コァーズの『ドルバック党』からの引用であるが、以下このコァーズの著書と前述のフジェールの伝記にもとずいて、当面の目的に必要な点だけを取り出してみよう。

アベ・レーナル。ディドロと同じ1713年の生れ。このアベと云う敬称は、彼がもとカトリックのコレージュで教育をうけた聖職者だったからで、『両インド史』執筆のころは現職の僧侶ではない。父は十五世紀にさかのぼる大ブルジョワの家系に属し、成功した富裕な商人だった。このことは、彼が1453年までたどれる古いカッサーニュの領主家の娘を妻に迎えたことによっても判る。その子ギョーム・サン・トマ・フランソワは、ロダズのイエズス会コレージュに学び、剃髪して僧侶となるが、その才を認められてプズナとクレルモンのコレージュで人文科学および雄弁術の教師を勤め、ソールーズ大学神学部の哲学教授となる。だが1747年、不明の理由からイエズス会を脱し、パリに向う。

(14) Alan Charles Kors, *D'Holbach's Coterie. An Enlightenment in Paris*. Princeton 1976, p. 21.

この青年時代の経歴から判ることは、レーナルがパリに出てくるまえ、すでに相当の学識をそなえた有能な知識人だったと云うことである。才能もないくせに、僥倖だけを頼りにパリにやって来た無学な若者を想像してはならない。レーナルの学殖は、『両インド史』の最も鋭い批判者だったテュルゴでさえも認めており、「彼はエルヴェンヌスよりもさらに博識で、雄弁である⁽¹⁵⁾」と書いている。

その才能は、パリでもすぐに認められる。パリ 高等法院の顧問であった友人のドオールが、報告書の原稿作成に彼をやとったのを皮切りに、各省のお偉方と近づきになり、そのゴースト・ライターをつとめるうちに、サン・セヴラン伯爵 (Comte de Saint-Séverin) およびピュジュー侯爵 (Marquis de Peuysieux) の顧問兼友人となる。ちなみに、前者は「王室政策顧問会議」の参事官、後者はフランス第一の外交官で、のちに外相となった人である。こうした政府高官との知己は、単に彼に仕事を与えただけではなく、彼が『両インド史』を書いたとき重要な情報源となった。⁽¹⁶⁾

1748年、ルソーと知り合う。ルソー三十六才、レーナル三十五才のときである。ルソーは『告白録』のなかで、この年下の友を、「私のためにこまかい心づかいと、真心にあふれたとりなしをしてくれた」誠実で心優しい友人として描いている。⁽¹⁷⁾

同じ年、彼はザクセン・ゴータ侯のパリ通信員を委嘱され、半月刊のニューズ・レター『文芸時報』(Nouvelles Littéraires) を発行しながら、パリの社交サロンや文学サロンを訪れはじめ、ディドロ、ドルバック、グリムと云った後期啓蒙主義の主要人物と親しくなった。もっとも、主要人物と云っても、これらの人びともレーナルと同年輩か年下の、まだ若い知識階級である。(1750年にはディドロとレーナル37才、ドルバックとグリム27才。)

1750年、レーナルは彼のパトロンの一人によってパリの新聞『メルキュール

(15) Abbé Morellet, *Mémoires sur le Dix-huitième Siècle*. Paris 1821, t. I, p. 216.

(16) Cf. Kors, *op. cit.*, pp. 162-163.

(17) Rousseau, *Les Confessions*. éd. de J. Voisine, Garnier, p. 437-8.

ル』の編集主幹に推され、就任する。この地位は、当時のフランスの文筆界では重要なポストで、彼はそこに四年間留まっただけだけれども、前述の政府高官内の友人関係とあいまって、これを通じてもレーナルは社会・経済の諸問題に関する豊富な知識と最新の情報を得ることができた。

1750年代の終り頃には、レーナルはドルバック家のサロンに集る啓蒙主義者のなかで随一の経済問題専門家だった。そのことを、モルレはその『回想録』にこう記している。

「このアベ・レーナルは………ほとんど政治と商業のことしか話さなかった。………彼は、われわれの集会にとって貴重な存在だった。と云うのは、彼は当時のニュースを非常によく知っていたからで、それは彼のサン・セヴラン氏やピュジュール氏との関係によるものだった。⁽¹⁸⁾」

『両インド史』の真の筆者はレーナルではなく、別の人びとだったと云う憶測は、このことから推しても、また前述の彼の経歴と学識から云っても、極めて疑わしいと云わねばならない。この代作問題またはディドロ代筆説については、のちに紹介するフジェールの詳細な考証があるが、そのなかでフジェールがつぎのように書いていることは、充分注目してよい事柄である。「このように本質的にポジティブで、実践的なのがレーナルの気質である。」「ディドロは、そのあらゆる才能にもかかわらず、固定観念にとらわれた信徒 (sectaire) にすぎない。これに反してレーナルは、散文的な常識をもった、卓見ある政論家である。⁽¹⁹⁾」

もちろん、多忙なレーナルは、十巻にわたる『両インド史』の草稿をひとりで仕上げることはできなかった。彼は実際にディドロの力を借りた。けれども人間の経済的活動を軸として世界史を編むと云う、その基本的構想は、あきらかに「ドルバック党」唯一の経済問題専門家で、国家財政や外交問題にも通暁していたレーナルのみが抱き得たものである。

レーナルが『両インド史』の構想をいつ頃抱いたかは明らかでない。しかし

(18) Morellet, *Mémoires*. t. I, p. 215.

(19) Feugère, *op. cit.*, p. 196-7.

コァーズは、「アベ・レーナルは、ドルバック男爵邸におけるわれわれの集りに最もせつせと通った一人」で、「いつもこの集会の中で彼の本を作った (faisant continuellement ses livres dans la société)」と言うモルレの回想を引用しながら、『両インド史』の作業が、ドルバックのサロンに通うあいだ、長期間にわたって続けられたとみている。そして、『両インド史』の大部分がドルバック邸に集る他の人びとによって書かれたと云う憶測を否定して、次のように述べている。「かれ自身の『哲学的歴史』のなかでレーナルの書いた部分が僅かだと云う疑念を生ぜしめたものは、疑いもなくこのあとの方の（モルレの）言葉である。だがウォルポールのある手紙によれば、レーナルにとって「^{フエサン}作る」と云うことは、自分のテーマについて沢山おしゃべりし、なんらかの情報を求めると云う意味だった。簡単に云うと、レーナルは、商業と国際情勢に関する彼の豊富な知識を仲間と与えるとともに、彼らが提供できるなんらかの情報なり、忠告なりを彼らから受け取ったのである。」⁽²⁰⁾

これは、かなり明確な作家像である。なお、コァーズは、レーナルが1750年代にはすでに、彼が政府高官のゴースト・ライターとして得た金を不動産に変え、その賃貸料で、自分好みのライフ・スタイルを追求する経済的余裕と独立性を得ていたことを指摘している。⁽²¹⁾ このことは『両インド史』の成立と一見無関係のように見えるけれども、レーナルの哲学的歴史の根源的視座を解明する上でやはり重要な事柄である。すなわち、レーナルは啓蒙主義的思想家であると同時に、経済人なのである。彼は自分の頭脳と手によって稼ぎ出した金で市民として充分安定した生活を得ている。おそらくこのことが、親から相続した広大な荘園の収入でぜいたく三昧に暮しながら過激な言葉を書きちらしている貴族のドルバックやエルヴェシウスと異って、彼が同時代のあらゆる啓蒙主義的思想家にさきがけて、経済学的要因にもとづく歴史的变化の必然性の直観へと達した最も主要な基盤をなしているのである。

さて以上のことから、『両インド史』が、ドルバックのサロンやその他のサ

(20) Kors, *op. cit.*, p. 21.

(21) Ibid., p. 196.

ロンに集る人びとの忠告や資料提供をうけながらも、当初レーナル自身の著作として誕生したことはほぼ確実である。だがその最終稿の完成には、彼は多くの人々の手を借りなければならなかった。そしてそのことが、彼の『両インド史』に思想的不統一の外観を与えるとともに、いわゆる代作問題を残すことになる。ここではこの問題に詳しく立ち入る余裕がないが、前述のようにフジエールの詳細な考証⁽²²⁾があり、『両インド史』におけるレーナルのオリジナリテを明確にするために重要な事柄なので、その要点だけでも紹介しておきたい。

フジエールによると、『両インド史』の執筆に直接参加したことが立証できるのは、ヴァラディエ、ペクメジャ、ドレール、ディドロの四人である。このうちヴァラディエは第12部の「真の栄光の定義」の筆者と推定される。ペクメジャは、のち1784年に思弁的空想小説『テレフ』(Téléph)を書き、革命期には教壇から議員となった人だが、この時はまだ完成原稿の整理とレビュー、字句の訂正ぐらいの役割であった。1726年生れの若い哲学者で、すでに『ベーコン哲学の精神』(1755)、『モンテスキュー精髓』(1758)、『サン・テーヴルモン精髓』(1761)を著し、『百科全書』の「狂信」(Fanatisme)の項の執筆者でもあったドレールは、のち1774年『ヨーロッパ図絵』(Tableau de l'Europe)を著して有名になるが、彼は『両インド史』の哲学的部分の担当を予定されていた。

ところが、ここにディドロが現れて、当初の計画が狂ってしまう。「事實は、ある晴れた日に、ドレールとペクメジャはこの著作家(ディドロ)によって仕事を奪われたと云うことである⁽²³⁾」と、フジエールは書いている。それは、どう云ったいきさつからか判らないが、ディドロが一万リーヴルで『両インド史』完成の仕事をレーナルから請負ったからである。このディドロの協力によって、さしもの尠大な『両インド史』も出版にこぎつけることができた。しかし、それと共に、そこには二人の著作家の気質の相違に由来する深い相克と

(22) Feugère, *op. cit.*, pp. 175-200. Cf. A. Feugère, "Raynal, Diderot et quelques autres historiens des deux Indes." in: *Rev. d'hist. litt. de la France*, juin 1913, 344-5.

(23) *Ibid.*, p. 186.

二重性が刻まれることになった。これがフジェールによって明らかにされた『両インド史』の思想的不統一の真の原因である。

ところで、われわれはこの最も周到なレーナル研究家が、つぎのように書いていることに注目しなければならない。たしかにレーナルは、金を払って完成原稿を協力者から「買った」のだが、それは「彼がそこに自分自身の思想^{イデ}を認めたから」にはほかならない。したがって「われわれはこの大部の『歴史』を、〈企業家〉レーナルの監督のもとに彼の協力者たちが伸ばしたり、縮めたりして完全に編集した論文のシリーズのように考えてはならない。」⁽²⁴⁾

レーナルは、決して今日人びとが考えているほど、独創性のない作家ではなかったのである。かれの独創性は、『両インド史』を単なる政治的文書としてではなく、その本来の使命において、文字通り「哲学的歴史」として見るとき発見されるに違いない。

2 旅へのいざない

『両インド史』の哲学的独自性は、どこにあるのだろうか？ 今日ひとびとはそれをディドロやドルバックのような有名な思想家の手が加わったと云う点にのみ見出している。では残りの部分は無価値なのだろうか？ たしかに現在、レーナルの『両インド史』から宗教や専制政治に対する派手な攻撃を除けば、そこには植民地の都市や島々に関する無味乾燥な歴史的・地理的事実の記述しか残らない。では、もし著者の狙いが単に既成の諸権力を打倒することだけにあったのだとしたら、なぜこのような廻りくどい道をえらんだのであろうか？

十八世紀における反権力的な政治文学の歴史を調べてみれば、しかし、このような印象が誤りであると云うことが判る。有名なメリエの『遺言』にしてもモンテスキューの『法の精神』にしても、いずれも堂々たる大冊で、職人が道具箱の中に隠しておけるような代物ではなかった。それにこう云う種類の本を買うのは、反宗教的感情をもった貴族か上流ブルジョワジーなのである。『百科全書』は言うに及ばず、フィロゾフたちの書物はすべてこう言う人びとのた

(24) Ibid., p. 198.

めに書かれたのだった。レーナルの『両インド史』も例外ではない。彼はそれを本来、ブルジョワと、ブルジョワ化しつつある貴族のために書いたのである。

では、なぜ当時のブルジョワジーは、今日のわれわれがへきえきするような無味乾燥な事実で満たされた本を、争って読んだのか？答えは簡単である。それは、彼らがこの事実そのものに深い興味を覚えたからにはほかならない。この問題についてフジェールは次のように書いている。「彼の時代には、『両インド史』はその主題自身の性質によって、生き生きとして楽しかった。それは異国趣味にとりつかれた読者に、充分満足できる多彩なスペクタクルを提供した。この本をめくると、かれらは無限に変るコスモラマが、今世紀を批判する辛辣な表現と一語に繰りひろげられるのを見ると云う、非常に生き生きとしたよろこびに出逢うのだった。」⁽²⁵⁾

十八世紀の精神の、これまで哲学史家によっても経済史家によっても触れられなかった部分が、ここでは問題なのである。十八世紀が「理性の世紀」だなどと云うのは、後の人びとがつくりだした神話にすぎない。十八世紀は同時に、異国趣味とオカルト趣味、そして感傷の世紀でもあったのである。ところで、フジェールによれば、この大衆の異国趣味と好奇心はそれ自身アクティブで批判的な哲学的精神の現れだった。「十八世紀は、決して非難に値いしない」と彼は書いている。「そこには退化した古典的精神とは別のものがある。……十八世紀は、なるほど偉大な古典的芸術を特徴づける深い道徳的観察を忘れた。けれども十八世紀は、十七世紀の人間が危険で無駄なものとして抗った質、すなわち好奇心を助長し、育成した。この普遍的でアクティブな好奇心は純粋な文学の問題の中では、その偏狭なドグマティズムをつめることができなかったが、少くとも他の領域では、それを破壊しようとしていた。……エキゾチックな風俗、習慣、土地が、次第に注目をひきはじめた。」⁽²⁶⁾

ここで取り違えてはならないことは、レーナルがその『両インド史』の企画にあたって、単に大衆の人気に投ぜんがためにこの異国趣味に便乗したり、あ

(25) Feugère, *op. cit.*, p. 403.

(26) Ibid., p. 104-105.

るいは劇薬を砂糖でくるむようにそれを利用したのではなかったと云うことである。閉塞された知的状況のなかにあつて、実際に人びとは異質の空間とその文化を知りたがってもいたのである。この問題について、ダニエル・モルネはつぎのように書いている。「これに反して十八世紀後半になると……………もはや生きるだけでは満足せず、学び、考えることを欲する人民が組織されてくる。……………民衆の関心をそそったものは多くの場合〈哲学〉であるが、しかしそれは、かれらが考えていたような哲学……………すなわち学問への愛、学びかつ考えようとする意慾なのである。それも単に自然権や〈契約〉のことではなく、あらゆる学問、自然の全体、生活の全体について考えようとした。人びとは、地理、外国語……………を学ぼうとしたので、ただ単に理論や共和主義を学ぼうとしたのではない。たいていの場合、人びとが求めたものは、〈体系〉や精神の法則ではなく現実であり、経験的な法則であり、実際的かつ役に立つ知識なのであつた。⁽²⁷⁾」

十八世紀のブルジョワの、かかる「浅薄な」精神を理解すれば、『両インド史』が「思想において不統一であり、人間についての真の体系とは無縁である」⁽²⁸⁾と云うテュルゴの批評など物の数でないことが判る。いまや人びとが求めているものは、「体系」などではなくて、何よりもまず事実であり、つぎにはこの事実から導き出される有用な経験的法則なのである。『両インド史』の成功の秘密は、もともと「哲学的歴史」と云う伝統的ジャンルのなかではじまった彼の作品が、偶然、この広範な大衆の知的欲求と合致した点にある。

レーナルの『両インド史』が、いかに見事に同時代のブルジョワジーのかかる知的欲求に合致したかを如実に示すものは、パリに住むイギリスの文学者ウォルポール (Horace Walpole) がレディ・アルズベリーにあてた次の手紙の一節である。

「それは、全世界について、征服、侵略、失敗、破産、成功がいかにして行われたかを語ります。……………それは貴女に、あらゆる国民の自然史と政

(27) Mornet, *op. cit.*, p. 473-474. 邦訳, 下, p.690-1. 邦文は邦訳を参照した。

(28) Morellet, *Mémoires*, t. I, p. 216.

治史を語ります。それは商業、航海、お茶、コーヒー、磁器、鉱山、塩、スパイス類、ポルトガル人、イギリス人、フランス人、オランダ人、デンマーク人、スペイン人、アラビア人、隊商、ペルシャ人、インド人、ルイ十四世とプロシヤ王、ラ・ブルトネー、ド・デュプレクスとソーンダース提督、お米、裸で踊る女たち、インド更紗とモスリン、何十億リーヴルやルピーや貝のお金、鉄の鎖と〔それに繋がれる〕シルカシア人の女たち、ローとミシジッピー〔会社〕について語ります。そしてあらゆる政府とあらゆる宗教に反対しています。⁽²⁹⁾」

ウォルポールの各項目のあげ方がいささか分裂症気味なのは、相手が気紛れな上流の貴婦人なのだから止むを得まい。それよりも、ここで彼がいかにも当時の上流階級の女性が興味をもちそうな主題を『両インド史』のなかから拾い出していることが注目をひく。お茶、コーヒー、スパイスなどの日用品。インド更紗（ギンガム）やモスリンと云った服地。それらの品々をヨーロッパへと供給する航海者や植民地の総督（ラ・ブルドネ、デュプレクス）。これらのことを、上流社会の女性も知りたがっているのである。

では、これらのトピックスに惹かれて、彼女が『両インド史』を読んだとしよう。何か起るであろうか？ 少なくとも外見上は、なにも起りはしない。彼女は相変わらず上流社会の貴婦人である。女性革命家にも、ウーマン・リブの闘士にもなりはしない。そんなことを、彼女はすこしも望んでいないし、また、そもそも、著者のレーナル自身がまったく望んでいないのである。

レーナルは何を望んでいるか？ 一言で言うと、それは人びとに教養を与えることである。しかし、この「教養」と云う言葉を単なる博識と取りちがえてはならない。それは、判りやすく言えば、自分が生れ育った国の文化や習俗、そして宗教と異った文化、習俗、宗教をもつ国々の人を受け入れることのできる広い心をもった心である。彼は、十五世紀にはじまる海上交通の進歩と新世界の発見がもたらした経済的革命によって「全世界がひとつの家族となる」と感

(29) *The Letters of Horace Walpole*. vol. V, p. 421. Feugère, *op. cit.*, p. 403-4および Belin, *op. cit.*, p. 307より引用。

じている。⁽³⁰⁾

ところで、どのようにすればこの精神の広がり、つまり教養を、人びとの心のなかに植えつけることができるであろうか？ ずっと後のことになるが、ヘーゲルは同じ意味における教養を市民社会に生きる具体的人間の必要条件と考えてあるギムナジウムでの講演のなかで、この教養を獲得する手段のひとつとして青年が知的な仕方で住みなれた世界から離れること、すなはちエキゾティシズムの必要性を論じた。「この分離の要求は」と彼はそこで述べている。「非常に必然的なもので、だからそれは周知の一般的欲求としてわれわれのなかに現れるのである。異質なもの、遠いものは、魅力的な興味をともなっている。……青年は、住みなれた土地を出て行って、ロビンソンと遠い孤島に住むことを幸福だと考える。」だが、それは彼が現に住んでいる世界の深さを知るための「必要な錯覚」である。その深さは、彼がとび出してゆき、そしてまたそこへ帰ってくるこの「中心点からの距離」によって測られる。したがって、この「魂の遠心力」にもとずいて、青年の心に「見知らぬ遠い世界」(eine ferne, fremde Welt) を植え込むことが必要である。⁽³¹⁾

レーナルは、むろんヘーゲルの教養の理論など知らない。けれども、レーナルが『両インド史』で用いたものは、これと全く同じ戦略なのである。それは人びとを、彼らが日常使用する様々な商品の産地であるエキゾティックな名の国々へと連れてゆく。そこから東西両半球にわたる広大な商業のルートを通してふたたび自分自身の生活に戻るとき、人びとの魂は、ヘーゲルが「教養」と名づけたあの精神的広がりを得るのである。

試みに『両インド史』の第一巻を開いてみよう。それは1419年のマデル諸島の発見にはじまるポルトガル人の東インドや東洋との通商の歴史に捧げられている。しかし、そのあいだに、アジア全域 (ch. 5), インド (ch. 6, 7, 8),

(30) Raynal, *Histoire philosophique et politique des Établissements et du Commerce des Européens dans les deux Indes*. 4 vols. Genève 1780, t. I, p. 589 (liv. 19, ch. 6).

(31) Hegel, *Sämtliche Werke*. Hrsg. von H. Glockner, Bd. 3, S. 240-1.

中国 (ch. 19, 20, 21) の地誌, 古代文化, 習俗, 政治, 宗教の記述が見出される。日本の「宗教, 習俗, 政府」の記述さえある (ch. 22)。これらの国々の名が, 他の巻に現れるサン・ドマング, アンチル諸島, ジャマイカ, トリニダート島等の名と同様, あるいはオレノコ河流域, ハドソン湾岸, カナダのイロクオイ族といった名と同様に, 当時の知識階級 (すなわち貴族とブルジョワジー) の耳にエキゾティックに響き, 彼らの好奇心をさそったことは, 容易に想像できる。しかもこれらの人びとは, 大部分けっしてこうした土地に行かないのである。彼らは, ミシュランの旅行案内のように『両インド史』を利用するのではない。むしろ, 自分が行く代りに, それを読むのである。そうしてみると彼らにとって『両インド史』とは, 時間と空間の二つの次元を自由に横切って異質な文化を歴訪する心の旅なのである。

この意味で, フランス啓蒙主義に関する最近の研究のなかで, ウェードが「レーナルの『両インド史』はそれに先立つ二世紀間に爆発した旅行文学の長い線の延長であり, いわば頂点であることに注意しなければならない⁽³²⁾」と述べていることは, 極めて正しい。

海外貿易と植民地戦争の最盛期である十七世紀と十八世紀は, アジア, インド洋, アメリカ大陸, カリブ海域等に散在する植民地の地誌や原住民の文化に関する多数の記録を生み出した。そのはしりとも云うべきものは十六世紀に出版されたラス・カサスの著作⁽³³⁾だが, これはヨーロッパ各国語に訳され, モンテニューにも影響を与えた。以来, 植民地および開港地の住民の記録は, カトリックの宣教師のお家芸となり, デュ・テルトル神父の『アンチル諸島誌』(1667), ラバ神父の『アメリカ諸島新紀行』(1722)と『西アフリカ新報告』(1728), シャルルボワ神父の『エスピニョーラ島誌』(1730)とつづく。こ

(32) Ira O. Wade, *The Structure and Form of the French Enlightenment*. Princeton 1977, vol. II, p. 325.

(33) Las Casas, *Brevisima relación de la destrucción de las Indias*. Madrid 1552. 最近この有名な文献が染田秀藤氏によって邦訳されたことは非常によろこばしい。(『インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波文庫, 1976年) なお本書の意義については, 同訳書のほか E. ウイリアムズ著『コロンブスからカストロまで』(川北稔訳, 岩波書店) I を参照。

のシャルルボワは、さらに『日本誌』（1736）と『パラグアイ誌』（1756）を書いた。1727年から1758年にかけては、イエズス会宣教師による浩翰な『伝道書簡集』二十七巻が出版され、デュ・アルド神父は、これを編集して有名な『シナ帝国の地理学的・歴史的・年代記的・政治的記述』（1738）を世に送り出す。

1740年から1780年代の終わりまでは、まさに紀行文学の全盛期である。この時期になると前述の様なファースト・ハンドの文献だけでなく、各種の探検航海の記録や住民の観察を編集したものも現れる。ジ・ョングリーンが企画し、のちにアベ・プレヴォーが引きついた『航海史』（17巻、1746—1751）、アベ・ランベールの『アジア、アフリカ、アメリカの諸民族の習俗………の観察集』（1749）、よく似た副題をもつアベ・ポワヴルの『哲学者の旅。アフリカ、アジア、アメリカの人民の習俗と技芸の観察』（1768）などがそれである。1768年には、ポウの『アメリカ住民の哲学的研究』のような「研究」までが現れはじめる。⁽³⁴⁾

ところで、これらの尠大な観察の記録は、レーナルの哲学的歴史にとって、またその先駆であるヴォルテールの『習俗試論』にとって決定的意味をもっていた。十七世紀の哲学は、もっぱらヨーロッパのキリスト教的文明のみを考察し、その抽象的形式を人間存在の普遍的原理とみなした。だが、今やその公式は通用しなくなった。レーナルは書いている。「最も文明化された国民の歴史が真の意味で人間の歴史なのだ、とその味方たちは云う。それ以外の土地はすべて、大地の形成以前に物質がそうだったカオスみたいである。」⁽³⁵⁾

(34) これらの文献を筆者は未見だが、その表題だけを以下に記しておく。

Du Tertre, *Histoire générale des Antilles*. Paris 1667-1671. Labat, *Nouveau Voyage aux îles de l'Amérique*. Paris 1722. *Nouvelle Relation de l'Afrique occidentale*. Paris 1725. Charlevoix, *Histoire de l'Île Espagnole*. Paris 1730-31. *Histoire du Japon*. Paris 1736. *Histoire du Paraguay*. Paris 1756. *Les Lettres édifiantes et curieuses écrites des missions étrangères*, Paris 1727-58. Du Halde, *Description géographique, historique etc. de l'empire de la Chine et de la Tartarie chinoise*, Paris 1735. Prévost, *Histoire générale des voyages*. Paris, 1745-70. Abbé Lambert, *Recueil d'observations sur les mœurs, les coutumes,.....de différents peuples de l'Asie, de l'Afrique et de l'Amérique*. Paris 1749. Poivre, *Voyages d'un philosophe ou Observations sur les mœurs et les arts des peuples de l'Afrique, de l'Asie et de l'Amérique*. Yverdon 1768.

(35) Raynal, *op. cit.*, I, 99-100 (liv. 1, ch.20).

ヴォルテールは、この危機を洞察した最初の一人である。かれは『諸国民の習俗と精神についての試論』(1753)において世界史を伝統的なキリスト教的目的論から解放し、それに代る新しい歴史叙述の方法を生み出した。その第一章は中国から始まるが、これは非キリスト教的文明をキリスト教的文明と対等化した最初の歴史だった。ヴォルテールは、同書において、文明の進歩を決定するものは理性に導かれた人間の意志だけで、不条理な教義にもとづくキリスト教と戦争とはこの進歩をさまたげる最大の障害であると主張した。⁽³⁶⁾

この考えは『両インド史』におけるレーナルの考えと基本的に同一である。レーナルは、あきらかに『両インド史』において、ヴォルテールの創造した新しいタイプの歴史叙述の方法を引きついでいる。ただ、彼はヴォルテールの歴史哲学のあいまいな部分を少し変更する。それは文明の発展に対する理性の因果関係である。この抽象的な因果関係は、もっと経験的に把握できる、物質的な因果関係におきかえられねばならない。

ヴォルテールは「シナの茶わんに入ったアラビアのコーヒーを飲みながら」、⁽³⁷⁾歴史の地平が拡大するのを見た。けれども彼はこれらの商品を生産し、供給する人間の物質的活動が人間性の発展において果す役割をついに理解することができなかった。これに反して、哲学的歴史家であると同時に「ドルバック党」随一の経済問題専門家でもあるレーナルは、ヴォルテールが見逃した人間の物質的欲望とそれを充足する経済的活動の世界史的意義を鋭くその視野の中にとらえる。「商業は養い、戦争は破壊する」⁽³⁸⁾と彼は書く。すなわち、彼の哲学的歴史の新しい神は、人間の物質的欲望を媒介する経験的行為たる「商業」なのである。 (未完)

(36) Cf. Wade, *op. cit.*, Vol. I, p. 435-465. Rihs, *op. cit.*, p. 120f. Jean Dagen, *L'Histoire de l'Esprit Humain dans la Pensée Française*. Strasbourg 1977, p. 299f. ただし、この見方はH・アルヴォン『無神論』(竹内、垣田訳、クセジュ文庫)による。『思想』1978年6月号には、『習俗試論』に関する安斉和雄氏と、市川慎一氏の二つの優れた論文がある。

(37) G. Lanson, *Voltaire*, Paris 1909, p. 125の言葉, Feugère, *op.cit.*, p. 115より引用。

(38) Raynal, *op. cit.*, IV, 598 (liv. 19, ch. 6).